



「先生、遅刻のこと忘れてなかったのね。案外、根に持つ性格だったりするんじゃないの？」
と美月。

「いやいや、性格の問題じゃなくて、あれは教師の愛情ってやつだよ。私にも愛情注いでほしいよー」

ケイが遠い目をして言う。こういう会話をきっかけに、また火花が散りそうだから不安だ。

「だったら、グレてみたらいいじゃない。ああ、あんたならその必要も無いか」

「いえいえ、美月さんほどは・・・」

ほら始まった。二人とも笑いがちよっと引きつっている。ここらで止めとかなないとマズい。

「ほら、もう学食、結構混んでるみたいだし、早く行って席をとらないと待たされるぞ」

「そうですね、急ぎましょう。ジョージ君の席も取っておかないといけませんね」

こういう時に、マリナは必ずフォローに入ってくれるので助かる。美月はちよっと不満そうだが、とりあえず衝突は回避。俺たちは、学食で空いたテーブルを見つけて、とりあえずロックする。

空いているテーブルや席はアウトバンドの情報から一目で分かる。食堂に入ると表示される仮想パネルでテーブルを選んで人数を入れると、その人数に合った椅子が予約中としてマークされる。これがロックするということだ。空席がある程度以上あれば、一定人数以上でテーブル単位でのロックも可能だ。ロックされた席は一定時間、他の生徒は使えない。ロック解除忘れを避けるために、ロックは10分で解除されるようになってから、その間に食べ物を取って席に座らないといけない。

ちなみに、食べ物、これもアウトバンドで表示されるメニューで注文を出し、配膳口に完了表示が出るのを待つ。個人単位に注文して、その料理の完了表示は自分しか見えないので、取り違いは生じない。待ち時間は、どんな料理でも、混雑時でも、だいたい5分以内。

俺たちは、思い思いの料理を手にしてテーブルに集まる。

「よーし、食べるぞー」

「一番楽しんで楽しんでた癖に、食欲あるじゃない」

いや、美月さん、食事中にまでそういう突っ込みはやめにしような。

「でも、確かにあの障害物はないよな。障害物ってより、もう敵だし。単に調整だけなら小惑星をいくつか配置すればそれで良かったんじゃないか？」

「いやいや、それじゃ面白くないでしょ。それに訓練機はいろんなシナリオが用意されてるから楽しいのよね」

「まあ、実機でゲーセン感覚が楽しめたってのは確かだけどな」

「でも、リアルでしたよねえ、あれ」

「途中でケンジがいきなり操縦投げ出すから焦ったわよ」

「投げ出すって、人聞き悪いな。あれは、武器が使えないか確認したかったからで、操縦を投げ出したわけじゃないっての」

「それなら、ちゃんとそう言うってから渡したらどうなのよ」

「だから、そんな時間は無かっただろ」

あれ、なんで俺と美月がやりあってる？

「まあまあ、お二人さん。喧嘩はしないの！」

「余計なお世話よ。私がケンジと何しようが勝手でしょ」

「おお、何しようが・・・って何するのかなあ？」

「おい、いいからちよっと飯食えよ。昼休みはそんなに長くないんだからな！」

そんな感じでやってるところに、ジョージがやってきた。

「お説教、終わったの？」

「お説教というか、結構大きな宿題もらっちゃったよ。今夜は徹夜かも」

「あらら、フランク先生も結構キツイねえ」

「宿題って、いったい何をもらったんだ？」

「それは明日まで内緒。まあ、こいつがらみなんだけどね」

と、ジョージは持ってきた箱を指さす。

「それ、いったい何よ？」

「まだ内緒。でも、うまくいったら、かなり役に立つ代物だよ。まあ、あくまでうまくいったら・・・だけどね」

「もう、じれったいな。じらさないで言っちゃいなさいよ！」

「ダメ！、先生に、言ったら宿題倍付けだってクギさされてるからね」

「倍付けか、そりゃキツいな」

「徹夜はいいけど、明日も遅刻したりしないでよね！」

「まあ、心配いらナイよ。たぶん寝る暇ないだろうし・・・」

ジョージは、やれやれといった感じで肩をすくめて見せた。しかし、フランク先生も結構キツいな。いや、もしかしたら、あのコワモテのサシガネか？

「とりあえず、早く昼食済ませなさいよ。午後の実習まで遅れたら、洒落にならないんだからね」

そうだ、とりあえずは午後の実習なんだが、最新鋭機からいきなり旧型の訓練機になって、うまくいくんだろうか。俺はかなり不安だったのだが、その予感的中することになる。

ジョージがフィルタプログラムを組み込んだものの、そもそも元になる情報の流量が多すぎて、コンピュータがオーバーロード気味。そんな状態では、機体の制御が極端に悪くなる。オートパイロットを使った基礎訓練はどうにかなったものの、マニュアル操縦では機体の反応が遅れるために、どうしてもコース設定に誤差が出てしまう。おまけに、STIBでは、自律制御機構がないので、どれだけ飛んでも状況は変わらない。おかげで、俺たちはコワモテに怒鳴られっぱなし。さんさんの実習になってしまった。

「よし、今日はこれで終わりだ。まったく、お前らのおかげでこっちが疲れちゃったぞ。まあ、初日から期待はしてなかったがな。明日はもうちょっとマシな飛び方をしてくれ」

コワモテが、疲れ切ったという表情で言うのだが、俺たちの状態はそれ以上に悲惨だった。午前中との落差もあって、ストレスが限界まで来てる、というか、意気消沈してしまっているわけ・・・

「まあ、ある程度予想はしてたがな。この機体には、お前らみたいなチームは荷が重いんだよ。でもなあ、フランクの言うとおり、こいつをどうにか出来なきゃ、一人前とは言えん。悔しかったら何とかしてみろ」

何とか、と言われても困る。そもそも俺たちがどれだけ頑張っても、コンピュータの処理性能が上がる訳じゃ無い。コワモテにしてみれば、励ましたつもりかもしれないが、俺たちはかえって暗くなる。

「やっぱりね。だから言ったでしょ、私と組むとロクなことがないって」

「おいおい、誰もお前のせいだなんて言っていないぞ」

「だって、それ以外に何があるのよ。私がいなきや、全部うまくいくんでしょ」

いかん、こいつはそうやって、これまでも全部背負い込んできたわけで、ここでまた同じことをさせるわけには……

「何言ってるの、あんた一人の問題じゃ無いよ。これはチームの問題だよ。ねえ、リーダー」

珍しくケイが真顔で言う。

「そうですよ。美月さんがいるから出来ることの方が多いんですから、そんなこと言わないでくださいね」

とマリナも言う。

「私には美月が必要。このチームじゃなきや、私もやっていけないから」

サムも真顔。そう、これは誰のせいでもない。ぜんぶこのオンボロ練習機が悪いんだ。でも、それ以外に選択肢が無いのも事実。

「僕も同感だよ。たぶん方法はあると思う。だから、このチームで頑張ろうよ」

「……ごめん……ありがとう。」

そう、ここはジョージに何かいいアイデアを出してもらおうしかない。だが、どうやってコンピュータの処理能力を上げたらいいか。いかに、ジョージでも難問だろう。

「そういえば、エイブラムス。お前、遅刻の罰として宿題があったな。さっさと帰って明日までに仕上げてこいよ」

「そうですね。こりや、意地でもやるしかないですね」

コワモテはニヤリと笑ってジョージを見る。

「よし、続きは明日だ。今日はもう帰って休め。疲れただろうからな。まあ、エイブラムスは、もうひと頑張りだが、アカデミーの歴史に残る悪行をやらかした意地を見せてみる。言っておくが、明日は遅れるなよ。宿題は理由にならんからな！」

「はあ、わかってますよ」

ジョージは、またやれやれ・・・という表情を見せる。

「これを持って行け。今日の実習の全履歴データが入ってる。たぶん役に立つだろう」

コワモテはそう言うと、小さなカートリッジをジョージに投げて渡した。

「助かります。これがあれば、早いですよ」

このカートリッジは、今日の実習での俺たちの操作や、機体の動作、その他の情報などが全部記録された。ペタバイトメモリチップである。いわば、宇宙艇のフライトレコーダーだ。このメモリチップは手のひらサイズだが、その容量は膨大である。ちよつとした街の電子図書館のデータなら全部格納できるほどだ。だが、今の時代は、その数億倍を超える量のデータが日々生まれ、処理されていくような時代だ。個人用コンピュータでも、高性能のものなら、これくらいのデータは少し時間があれば処理できる。宇宙機のフライトコンピュータはその量のデータをリアルタイムで処理するのだから、その能力がどれくらいのものかわかるだろう。だが、その処理能力を超えるデータを生み出す奴もいる、ということが問題なのである。ジョージの宿題がどういものかはわからないが、俺たちの役に立つものなら、頑張っって欲しいところだ。

俺たちは、宇宙艇を降りて格納庫を出ると、そこで解散した。附属校の学生は全員が寮住まいだ。学生寮は、男子寮と女子寮がこのゾーンにはそれぞれふたつ、北居住区と南居住区に置かれている。俺と美月は南側、あとの4人は北側だ。ちなみに、南北は便宜上、ステーションの回転軸方向で、地球同様、北側から見たときに自転が時計回りに見えるように決められている。東西も同様に自転方向で決まる。

「ねえ、ちよつと歩かない？」

「ああ、いいよ」

附属校訓練施設から南学生寮までは、車で10分ほどだが、歩けば小一時間かかる。まあ、実習日は終わるのも早いから、まだ日暮れまでは間があるし、今日は美月につきあってやるのもいいだろう。

「ケンジ、本当にこれでよかったの？ 私があのチームに入って・・・」

「なんだ、まだそんなことを気にしてるのか？ いいに決まってるじゃないか。みんなもそう言ってただろ」

「でも、この先、またきつと色々問題が起きるにきまつてる。そのたびに、こんな気分になるのは辛いよ」

「美月らしくない発言だな。いつもの元気はどこへ行った？ 心配ないって。うちのチームのメンバーは本当にいい奴らだし能力もある。問題が出てきつと解決できるさ」

「だから、辛いよ・・・。疫病神呼びわりには慣れてる。そんなこと言われても気になんかしない。でも、このチームは違う。みんな一生懸命になんとかしようとしてくれるわ。けど、それが大きな負担になってることがわかるから・・・」

「いや、たぶんそれだけの価値があるんだと思うよ。美月がいるおかげで、使える情報が圧倒的に増える。これをうまく共有して使いこなせたら、凄いいことになると思うんだよ。みんなもそれを期待してると思うんだ。逆に、美月は他のメンバーの処理能力に頼ることもできる。これはお互い様だよな。だから気にするな。それよりさ、あきらめずに、なんとかする方法をみんなで考えようぜ、なっ！」

俺は笑って親指を立て、そしてウインクして見せた。美月は、ちよつと赤面して目をそらす。

「ケンジ・・・のくせに」

美月がつぶやく。久しぶりに聞いたが、ケンジという名前は、出会った直後からこいつの辞書に、ろくでもない意味がたくさん登録されてしまっていた。一年たつて、消去されるかと思っただが、まだ健在らしい。

「ケンジで悪かったな」

「ケンジのくせに・・・生意気なんだから」

はたから聞いたら意味不明な会話だが、そういえばあの時もこんな会話があったつけ。そう、入学式前日、こいつと乗り合わせたシャトル事故の時・・・。普段強がっている美月が、

弱音を、というよりも本音を吐けるのは、もしかしたら俺だけなのかもしれない。それも、あの事故と一緒に乗り切った結果として生まれた一種の信頼感だろう。

「そういや、ジョージの宿題ってなんだろうな」

「わからないけど、すごい思わせぶりだったわよね」

「少なくとも、うちのチームにとって悪い話じゃなさそうだけど、気になるよな。あとで連絡してみようか？」

「止めといた方がいいんじゃない？結構大変そうな感じだし、邪魔しない方がいいわよ」

「そうだな。まあ、明日になれば分かるし」

「ジョージが来れば・・・だけどね」

「だよな。明日は出がけに連絡しとくか」

「そうね、それがいいわ」

よかった。なんとなく美月も元気を取り戻したみたいだ。まあ、少し弱ってるくらいが扱いやすくいいんだけどな、こいつは。

「ケンジ、あんた、何ニヤニヤしてんのよ。また何か変なこと考えてたでしょ」

「考えてねーよ。てか、何考えようが俺の勝手だろ！」

「どうせまたエロいことでも考えてたのよね。私にはお見通しなんだからね」

いかん、だんだん元に戻ってきた。これ以上元気になられても困るんだが。この分だと寮に戻る頃には完全復活してるな。その分、俺はエネルギーを吸い取られてそうだな。

俺は無視して歩く。ペースを上げる。

「ちよっと！ 何逃げてんのよ。待ちなさいよね！」

美月が小走りに追いかけてくる。そろそろ夕暮れ時が近づいて、空が、といっても人工の強化シールドなのだが、少し赤みを帯び始めていた。